

作品の制作過程を視覚化しまとめる方法について

聖徳大学 児童学部 准教授 西園政史



1. 制作過程や思考の可視化

現在、勤務している大学（幼稚園教諭や保育、小学校教諭を目指す学生に指導）では、制作過程の重要性について、2年次の図画工作の授業より説明しています。美術や美術教育を専門にされている方には、制作過程を分析的にみることは、自然な捉え方だと思いますが、美術を専門的に学んでいない教員養成の学生からすると、当たり前ではない捉え方と言えます。

今回は、作品の制作過程における学びを可視化するために「ドキュメンテーション」という考え方を取り入れているということについて、教員養成大学での実践的な視点から触れてみたいと思います。

一般的には、作品をつくるという経験では、どのようにしたら理想とする作品ができるのかを、自問自答しながら、または、参考となる作品などを観て自分なりの答えとなるイメージを導き出し、検討が行われます。そして、何度も作品をつくるなかで、反省的に作品を分析し、この連続によって、美術に対する見方・考え方もできるようになっていきます。質感や構成、量感、または空気感など、美術を専門とする感覚や知識は、この流れのなかで培われていくと言えますが、この時、これらの経験とともに、作品の性質（クオリティ）を感じとる力が構築されます。制作や鑑賞を通して得られるこれらの経験は、作品を読み解く能力となって個々人に定着すると考えています。

この前提のもと、本学学生の様子をみると、とても器用に作品を作り上げます。キャラクターをデザインさせても、紙版画をやらせても、そつなくこなします。目的に合わせて必要なことに対応する力は、十分備わっていると感じます。しかし、足りないこととして、作品と深く対峙する姿勢、または、

作品を反省的に捉える力、思考・判断する力がまだ培われていないと感じました。

高校を卒業して2年目の学生にとっては、これまで「問題を解く」という学習を中心にしてきました。

もちろん、アクティブラーニングが取り入れられている世代ではありますが、作品をつくることに対し反省的に捉え、思考するという経験は、あまりないように感じられました。高校までの経験を考えれば、自然なことだと思います。

そこで、本学では、春学期・秋学期それぞれ15回の授業内容を一冊のスケッチブックにまとめることを行っています。その際、「ドキュメンテーション」という視点を意識させ作成します。

さらに、課題ごとのまとめでは、3つの視点で考察します。

- (1) 教師の目：幼稚園教諭や保育士、小学校教諭になったとし、指導者の立場で考え調べ、論じる。
- (2) 子どもの目：子どもの視点や行動、発想を意識し、考え調べ、論じる。
- (3) 学生の目：今の自分が感じ考えたことを論じる。



(写真1) (写真2) 1年間の最初の頃の課題

まとめの際に、課題内容や作品の紹介にとどまるのではなく、制作過程を自分の行為や思考とともに、指導者や子どもの視点での気づきを言語化し記録することを習慣化させます。

2. ドキュメンテーションという捉え方

作品制作には、作品の表面には見えていない感覚や出来事、情報が多くあります。それらをどのように視覚化したらよいのか。ここで用いる方法が、「ドキュメンテーション」となります。ドキュメンテーションは、活動のなか

でどのようなことが行われたのかを、写真や動画、言葉を用いて記録することを指します。活動の記録という意味で、他に「ポートフォリオ」「ラーニングストーリー」「ラーニングダイアリー」などがあります。それぞれの国や地域、園で形式、方法、名称は様々ですが、保育・教育の過程や内容を記録したもの、または、学びを可視化したもの、というイメージは共通しています。子どもたちの活動を視覚的に、より明



(写真3) (写真4) 1年間の中頃の課題

確に学びが捉えられるようになり、保育者同士が情報共有したり、保育の改善に活かしたり、エビデンス（根拠・証拠）として、保護者に説明できる資料としても活用されています。

ドキュメンテーションは、子ども一人ひとりの成長や道のりと、学びの広がりや深まりを見える形で表したものになります。本学では、この考え方を土台に、学生自身が、作品の制作過程のなかで、何をし、何を感じ、何を考えたのかがわかるように、記録することを行います。制作を時間軸で捉え、物との対話、他者との対話、環境との対話のなかで、何が起こったのかを、写真と言葉で記録します。写真撮影に関しては、各自の持っているスマートフォンや携帯電話、デジタルカメラを使用して行います。

本学児童学科の授業課題では、この方法を用いて一冊の本のようにまとめるという意味で、「ドキュメンテーション・ブック」という名称をつけています。

課題をドキュメンテーションの視点で一冊のスケッチブックにまとめる良さとしては、以下が考えられます。

- (1) 「今」何をし、何を感じ、何を考えたのかを、具体的にすることができる
- (2) 写真の記録を通して、感覚を含む制作過程を振り返ることができる
- (3) 写真の記録と行為の言語化によって、作品を反省的に捉える視点が生まれる
- (4) 教師の目、子どもの目、学生の目の3つの視点で捉える習慣が生まれる
- (5) 1冊にまとめることで、いつでも振り返れるオリジナルの参考書になる

3. 美術に対する見方・考え方の構築

課題に取り組み始めた初期の写真1、写真2の頃は、まだ言語化できている量が少ないです。これは、まだ制作過程で起こることのポイント、指導するポイントが見えていない段階です。そして、徐々に、反省的にまとめることとつくることをみつめ、課題に取り組むようになります。1年間の中頃となる写真3、写真4の粘土の課題では、さらに制作過程が詳細に示されています。1年間の終わりの頃となる写真5、写真6、写真7では、制作の流れに加え、要素ごとや細部に寄った視点を示すことで、作品の伝えたいことや、自分のこだわりが追加され、さらに詳細に読み取ることのできるページとなっています。

このように、スケッチブックにまとめる際に、自らの制作過程を言語化することで、その時そこで何が起きているかというドキュメンテーション的な視点を意識することにつながり、美術に対する見方・考え方が具体的に理解できるようになってきます。

この力は、小学校図画工作科学習指導要領の示す「共通事項」の理解にもつながります。A 表現、B 鑑賞の両方の領域に共通する内容として共通事項がありますが、共通事項が設定された経緯について、文部科学省は、以下のように説明しています。

小学校図画工作科に関しては、いろいろな調査などから、児童が図画工作を勉強しても、生活や社会にどのように役立つのか分からないと感じていることが分かりました。また、中央教育審議会などで、膨大な視覚情報にさらされている児童に必要な力を身につけてほしいという声がありました。そこで、表現でも鑑賞でも、造形遊びでも絵や立体、工作でも、共通して働いている資質や能力を〔共通事項〕としてまとめ、これをもとに指導を行うことを示しました。具体的には、児童が自分の感覚や活動を通して形、色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえ、これを基に自分のイメージをもつことが十分に行われるように学習活動を検討する必要があります。¹⁾

今回紹介しているドキュメンテーション的に捉えまとめる方法は、子どものえがく・つくる・みる行為から、形、色、動きや奥行きなどの造形的な特徴を読みとる力の基礎を築くことにつながる、と考えています。また、共通事項の視点は、図画工作のなかだけで成立するものではありません。作品は、個々人のもつ経験が、テーマや材料、画材、道具と出会い形作られます。そして、図画工作で得た経験も、一つの経験として、他の経験に影響を与えます。その意味において、作品の表面だけではわからない広い意味での資質や能力を読み取る力は重要となります。

※ 共通事項は、形や色彩、材料などの性質や、それらがもたらす感情を理解したり、対象のイメージをとらえたりするなどの資質や能力を育成し、表現や鑑賞の能力を高めることをねらいとしています。これらは、表現及び鑑賞の学習の基盤となるものであり、すべての学習活動において共通に指導することが大切です。²⁾

4. 反省によって理解する作品の性質（クオリティ）

作品に対し、反省的に捉え、思考するという時間は、作品の性質を経験的に理解することにつながります。哲学者であり教育学者であるジョン・デューイは、「経験」について、次のように言っています。

経験は絶えまなくおこる。なぜなら、生き物と環境条件との相互作用は生きる過程そのものだから。そこに抵抗と葛藤の条件が加わる。すると、この相互作用に関与する自我と世界の外観と中身は感情と観念をとまなうようになる。そして、経験の性質が変わる。その結果、意識的な意図が生じる。しかし、こうしてなされた経験は、しばしばまだ始まったばかりの未熟なものである。諸事物は、経験されているものの、〈一つの〉経験 (an experience) にはまだなっていない。そこには、混乱と散乱がある。われわれが見聞きし、考え、欲してえたものは、相互にしっくりとまとまっていない。³⁾

この言葉から学生の作品制作という経験を考えると、授業内で課題を行っただけでは、一つの経験となっておらず、授業での制作やスケッチブックへのまとめを通して、作品をつくるという経験、作品を指導するという視点が徐々に一つになっていくと考えられます。デューイは、経験について川に例え、つぎのようにも言っています。「川は、池とちがって流れている。この流れは次々と連続する諸部分に大きい個別性やおもしろみを与える。(中略) 前後どちらの部分もそれじしんの個別性を獲得する。そこで、持続する全体としての流れは、次々とおこるこれらの局面によって多様化されるのである。」⁴⁾

一つの経験としての定着までには、様々な出来事があり、体験があります。もちろん美術以外の様々なことが常に流れ続けています。そして、その流れのなかで、つくること、反省的にみること、まとめることによって、作品の性質を徐々に理解できるようになっていくのだと考えています。作品をつくって終わりではない状態を築くことが、指導者としての必要な学びの定着につながると言えます。

このドキュメンテーション・ブック（スケッチブック）を作成することについて、学生との対話から、次のような意見が聞こえてきました。

「最初は、何をやっていけばいいかわからなかったけど、つくりながら、段々と必要な写真がわかり、切り取る場面がわかってきました。」「その時の状況を伝えるために、工程の写真を逃さないように心掛けた」「まとめる際に、テーマを持ってデザインすることも心掛けました。」「スケッチブックにまとめておくことで、後で見返すことができる」「つくったことをスケッチブックにまとめることで、学びが定着

する」「達成感がある」「将来の自分に向けたアドバイスが、体験と写真と言葉でみえる」「作り方を考えたりまとめ方を考えたりすることで、考える力がついた」

もちろん、作成することが大変であるという意見もありますが、こちらの目的が反映された言葉を聞け、この方法が学生の学びになっていることが読み取れました。

5. おわりに

今回は、作品の制作過程を視覚化し、ドキュメンテーションという方法を用い、1冊のスケッチブックにまとめることについて紹介しました。学生にとっては、授業の内容をまとめる課題として位置づけられていますが、作品をつくることやスケッチブックにまとめることを通して、指導者として必要な能力を身に着けることにつながっています。また、スケッチブックにまとめる前提で作品制作に取り組むことで、作品制作の中身を読み取ろうとする意識のもと、能動的に授業に取り組む姿勢につながっているように感じられます。

授業を通して、自らの体験とともに美術を語れる指導者が増えることを、今後も望んでいます。

引用文献)

- 1) 文部科学省ホームページ, 学習指導要領改訂の基本的な考え方に関する Q&A,
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/08.htm, 閲覧: 2022年1月.
- 2) 同上
- 3) ジョン・デューイ(John Dewey), 栗田修訳, 『経験としての芸術』, 晃洋書房, 2010年, p.39.
- 4) 同上, p.40.

参考文献)

- ・森真理, 『子どもの育ちを共有できるアルバム ポートフォリオ入門』, 小学館, 2016年.

2021年度 造形美術教育フォーラムのご案内

テーマ：創造、探究、問い直し、そのきっかけは画材（キットパス）

開催日時：2022年 **2月19日**（土） 13:30～16:30

開催方法：**ZOOM**

参加対象：全美協会員と教育・保育関係者

参加人数：ワークショップ参加者＝申し込み先着順20名。左記以外は人数無制限。

私たちは幼いころから様々な画材に親しんでいます。クレヨン、パス、マーカーなどはその代表格です。こうした画材と出会い、様々な技法にチャレンジしたり、どんなものに描けるのか、らくがきや試行錯誤を楽しんだりしながら豊かで多様なイメージの創出を楽しむ過程の中で、私たちは実に様々なことを体感し、学びを得ています。

この度のフォーラムでは、全美協の賛助会員である日本理化学工業株式会社開発の環境固形マーカー「キットパス」を取り上げます。

「キットパス」を使ったワークショップや、多角的な視点で様々な現場で行った実践報告を行い、画材としての可能性を体感し、キットパスを使って起きた様々な学びを皆さんと共有したいと思います。



■日程：2022年2月19日（土）13：30～16：30

■開催方法：zoom 開催

環境固形マーカー「キットパス」をきっかけに、新たな創造、探求、問い直しの時間をもちませんか？
キットパスを使い、参加者が各自でやってみたいことにトライする**教材研究型ワークショップ**です。
幼児～大学の実践発表に加え、ワークショップ参加者の取り組みをオンライン上で共有し、ディスカッションします。

参加申し込みは全美協 HP または右下の QR コードから。
オンラインワークショップの参加者（先着 20 名）には、事前にキットパスをお送りします。
見るだけの参加（人数無制限）も OK です！
申し込み締め切り：2022年2月7日（月）

■主催：全国大学造形美術教育教員養成協議会
■協力：日本理化学工業株式会社（賛助会員）
■お問い合わせ：mak.sato@mejiro.ac.jp 佐藤牧子（目白大学）
■全美協 HP：https://www.zenbikyoo.com/about/



お申し込み専用 QR

内容（予定）

① キットパスについて

② 実践・研究報告

（大成哲雄：聖徳大学、佐藤牧子：目白大学、鳥越亜矢・山本房子：中国短期大学）

③ キットパスを使ったワークショップ（聖徳大学とワークショップ参加者を ZOOM で繋ぐ）

・キットパス事業部の方を講師に、リカレント教育の意味を持たせて聖徳大学で卒業生の保育者を対象にしたワークショップを行い、それを ZOOM で中継します。

・先着 20 名には事前にキットパス等を送付しておき、聖徳大学等でのワークショップの中継を見ながらワークショップに参加してもらいます。

④ 質疑応答・感想の共有

申 込：申込は[こちら](#)

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSd8B3qFX74IMtNbHiNgY1bIVN76Zt9NQ5CaBtxT4XrHTLtW9w/viewform>

申込期限 2022 年 2 月 7 日

問い合わせ先：佐藤牧子（目白大学） e-mail: mak.sato@mejiro.ac.jp